

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 神社と図書館

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新藤, 透, Shindo, Toru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000755

神社と図書館

新藤 透

「神社と図書館」という題名をつけたが、読者の中には神社と図書館にどんな関係があるのか、と疑問に思われた方もいるだろう。決して誤りでも大仰なタイトルでもない。かつて神社に多数の書物が奉納され、それを管理するために文庫が設置された。そして現在でも図書館を開設している神社は確実に存在している。つまり図書館は神社とも関係が深いのである。

図書館の歴史を紐解くと、古代中世社会においては宗教施設内に設置された事例が多い。聖典などを永久的に後世に残すことが目的で図書館が設けられたようだ。海外では宗教施設内に図書館が設けられたことが多く、代表的なのは中世ヨーロッパの修道院図書館であろう。

わが国でも仏教が伝来し聖徳太子などの為政者によって大寺院が建立されると、経典を収蔵する経蔵が附設された。仏教の教学上最も重要なものとして「仏・法・僧」の三・玉があり、大乘仏教では「法」が経典を指すと考えられている。したがって経典を収蔵する経蔵もまた、宗教的な権威を帯びるものであったのである。

奈良時代になると朝廷によって大規模な写経事業が行われた。写経を円滑に進めるためには、どの寺院にどのような経典が収蔵されているのか把握する必要がある。東大寺の智憬という僧侶が各寺院や貴族が所蔵している経典を調査し、目録を作成していたことが判明している。この智憬こそが氏名が明らかになっている「最古の司書」と指摘する研究者もいる（小川徹ほか『図書館と読書の原風景を求めて』青弓社）。

仏教に経蔵があるのならば、神社にも類似した施設はある。それが神社文庫である。図書館情報学では神社に附設さ

れた文庫をそのように呼んでおり、有名なものに伊勢神宮附属の神宮文庫がある。

神宮文庫は天平神護二年（七六六）、内宮に文殿が設けられたのが起源で、次いで弘長元年（一二六一）に外宮に神庫がつくられた。両文庫に収蔵された書籍は、伊勢神宮に奉納されたものであって、それらは必ずしも神宮に関連がないものも多く含まれていた。神職たちの調査研究に利用されたと考えられるが、内宮と外宮との対立から両者が一本化されることは長らくなかった。江戸期に入ると文殿と神庫は整備され、前者は林崎文庫、後者は豊宮崎文庫となる。明治三十九年（一九〇六）に林崎と豊宮崎の両文庫は統一され、神宮文庫となり現在に至っている。

このように神社文庫の特徴として、神社に奉納された図書をただ保存するというだけで、仏教寺院における経蔵と経典のような関係ではなかった。神社に奉納された図書の内容は、神道の信仰とは直接関係がなかったのである。神社文庫の奉納図書は、神社が一般社会から信仰対象として働きかけられた結果、受身的に発生してきた現象で人と神との関係における「供え」の一種であったと考えられる。

このように神社文庫は奉納図書を基盤として発生したのであるが、その種類は大別して二種に分けることができる（草野正名「神社文庫の発生…奉納図書を中心にしての考察」『神道宗教』第十五号）。

① 学者や篤志家が図書の寄進を神社に行い蔵書が増えたもの。さらに江戸期に入ると書籍商仲間が積極的に新板書籍を神社に奉納した。この種の神社文庫の蔵書は公開されることがなかった。

② 民衆の間に敬神観念が高まると同時に神社は教学活動を活発に行い、その積極的活動によって民衆からの図書寄進が相次いで神社文庫の蔵書が充実した。これらの文庫の中には公開されたものも多い。特に福岡の櫛田文庫は公開文庫として有名で、神職だけではなく民衆にも開かれており貸し出しも行われていた。

現在でも書籍を多数所蔵し「文庫」を冠している神社は存在する。鶴岡八幡宮の鶴岡文庫、靖國神社の靖國偕行文庫、大分県別府市八幡朝見神社の朝見文庫、熱田神宮の熱田文庫、鹿児島市照国神社の照国文庫資料館、厳島神社文庫などが知られている。しかし神社文庫を扱った研究はほとんどなく、國學院大學出身の図書館学者草野正名ぐらいであろう。今後の研究が期待される領域である。